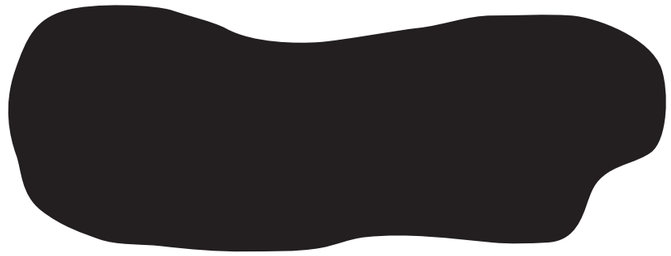
まちのミカタ

Litaracy



あなたの頭の中を
わかりやすく明文化!

山田(Lita)を
らいていんぐ

■口述ライター：
深田賢之 | KENSHI FUKADA
NPO法人岡崎まち育てセンター・りた　ニューフェイス

Theme

テーマ：「真説：生活芸術」

「まちづくり」という言葉が一般的に使われるようになって久しい。だが、「まちづくり」とは何ですか、という質問に対する答えは難しい。公共空間の構築・運営に関し、できるだけ多くの市民の意見を吸い上げることがまちづくりであると論じることもできる。あるいは、まちのビジョンと方向性を先行してつくり、そのビジョンに向かって市民の方々を巻き込んでいくことがまちづくりであると言うこともできるだろう。しかし時として、市民意見の集約は特徴のない事業を生み出し、ありきたりのビジョンの押し付けは後ろ向きな活動を生み出すという現実を、彼は目にしてきた。

そこで彼が提起したいまちづくりとは、「個人の価値観の集合体がまちをつくる」という考え方である。「僕はこれが好き」「私はこんなことがやりたい」という一人一人の日々の生活の中にある価値観や感性、思い、行動が、一つ一つ積み重なっていくことによってまちがデザインされていくのである。個人が輝きを増すことが、まちを面白くする原点であり、総論ではなく各論の志向である。例えば、商店会ではなく個々の商店主に、マンションではなくそこに住む一人一人の住み手に焦点を当てていく。彼は、こうした「私的」な輝きが、「公」のデザインにつながるという考えを「生活芸術」という言葉で表現している。

「生活芸術」とはあくまで個人の内面的な思考プロセスを指すものであり、完成形としてのモノや活動を指してはいない。例えば、ある人が道路から見える窓際に一輪の花を飾ったとしよう。花を飾るという行為そのものについては、ここでは是も非も問わない。なぜなら、花を飾る行為がいいことだというのは、個人的な価値観に過ぎないからである。むしろ「生活芸術」という考えでは、最後に選択した商品や行為はどのようなものであっても、その結果に至るまでに個人が考えてきた知識や感じ取る視点に重きが置かれている。花を飾るという行為に至った過程を振り返れば、現状に対して何かを変えたいと感じ、様々な視点や自らの知識をもとに、「なぜ私は花を飾ろうと思ったのだろう？」「この花を飾ることで、私はこういう思いをまち行く人に届けよう」と考えて行動を選択したはずである。そうした内面の動きを自問自答していくと、そこには私が花を飾った意味やプロセスを包含した一つの物語が生まれる。その物語を自覚することで、次なる行動へと自らを導くのである。商品や行動の見た目（流行やデザイン）だけで判断していては、誰かのマネでしかないが、その意味を考え、生活をよりよくしようという視点をもつことで、あらゆるモノやコトに対して、自らの内面から湧きおこる価値観に応じた行動ができる。

個人の価値観から始まり、その価値観を掘り下げることで意識が高まり、一人一人の行動の結果として、まちができていくのである。これが、私たちの考えるまちづくりであり、個人の力は小さくとも、今の小さな取り組みの積み重ねが１００年後には大きな歴史となるだろう。

Litaracyから放つ「生活芸術」とは、誰かに個人的な価値観を押し付けるような「レコメンデイション（推薦）」ではなく、多様な価値観や視点、知識を包含した物語を共有するための「ステイトメント(表現)」である。

「生活芸術」とは
個人の内面的な思考プロセスに重きを置いている。
最後に選択した商品や行為はどのようなものであっても、
その結果に至るまでの視点を掘り下げる中で自覚される
物語の積み重なりがまちや歴史を形成していく。

まちのミカタ
Litaracy
2012.5 vol.57

発行・編集
特定非営利活動法人　岡崎まち育てセンター・りた
〒444-0059 岡崎市康生通西4丁目71番地
岡崎市図書館交流プラザ2階市民活動センター内
TEL (0564)23-2888／FAX (0564)23-2898
http://www.okazaki-lita.com／http://www.facebook.com/okazaki.lita

配布
岡崎市図書館交流プラザ・Libra／岡崎市内の地域交流センター
会員宛へ郵送　等　※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力
Ragslow／亜cha:la／F.it／森の花畑／FMおかざき／
杉くんの駄菓子屋／FURAgallery／angelshare／
長誉館／cafeくらがり

ID_000057

生活芸術

まちづくりという仕事

きっかけは僕が持って行った祭りのチラシだった。そのお店の主人もお祭りが好き、という話から女将さんとの会話が弾んだ。

「私は、あの人が小さいころそうだったように、子どもたちがこのまちでワクワクしたり、祭りのたびに特別な気分を味わったり、そういうのを遺したいだけなんです。そうすれば普通の子が育つのにねえ。」

僕がまちづくりの勉強を始めた今から15年ほど前には、まちづくりという仕事は日本にはなかった。今、僕は「まちづくり」を仕事にしているが、それは幸運のようでいて、心の底では本当は必要のない仕事ではないか、という思いが渦巻いている。もともと、そんな仕事はなかったのだ。

まちに暮らす一人ひとりが、当たり前のように、祭りとなれば仕事や学校を休み参加する、地域の子どもたちに目を配る。どこの誰だか知っている。叱る。問題が起きたら話し合うまちに暮らす一人ひとりが、まちを営むために、当たり前のように参加する。そんな当たり前なことが立ち行かなくなくなったとき、まちづくりという仕事が生まれた。

中町に「ショッピングセンター　アロー」というスーパーがある。スーパーと言っても、八百屋、酒屋、肉屋、魚屋など、それぞれの店が独立しており、別個に会計をする今となっては珍しい形態をのこしている。「商品を買う」という点では、コンビニやショッピング・センターと変わらないが、買い物の質がまるで違う。どちらが高級とか安いとかそういう話ではない。アローは「雑談」の風景にあふれている。常連さんに比べれば、デビューも遅く、頻度も低い僕ですら、「お兄ちゃん、今日はなにするの？」と会話に巻き込まれ、瞬く間にその日の献立がつまびらかにされ、隣のおばちゃんのおすすめも加わり、買い物かごが埋まっていく。ここでは、商品のやり取りを通じて、「物語」が生まれる。

コンビニやショッピング・センターのレジでは、こんなやり取りが交わされることはない。これらは「商品を買う」という機能に最適化された空間を提供してくれるが、物語は生まない。

こうしたコミュニケーションを疎ましく思う人もいるだろう。品揃え、価格、いずれにしても大型ショッピング・センターやインターネット通販にはかなわない。しかし、僕はそうした商品の多様性が増えるのと引き換えに、まちの多様性が失われていくことが残念でならない。

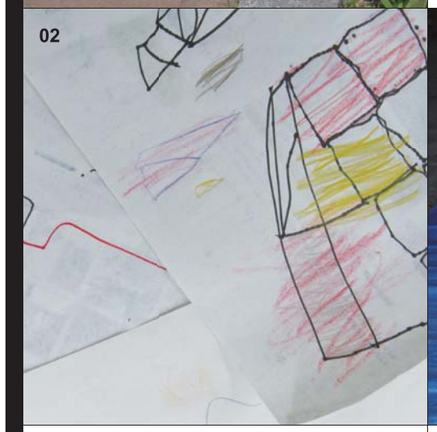
まちから物語が消えたとき、まちのことを語りたい人がいなくなったとき、そのまちは誰にとっても大切なまちではなくなってしまう。

まちづくりという仕事に存在意義があるとすると、物語を生むまちの多様性を守り、育むことなのかもしれない。

（A）

まち と 暮らす

01



02

03

04

01 身体で感じる故郷の風

４月から故郷・岡崎に戻ってきました。高校時代以来の自転車で通勤しています。のんびりと走っていると、「あ～、この店は当時のままだな」「そういえば街路樹はこんな感じだったな」などと思い出されます。

でも、心の底から懐かしさを感じるのは、車道の段差に自転車があたり、走りにくさを体感するとき。身体が当時の感覚を覚えていて、「こんなふうにして通学していたなぁ」と思い出します。

当時の自分に懐かしさと若干の愛しさ（？）を感じながら、このまちを好きになるというのは、自分を好きになることと同じことかなと思いつつ、今日も風を感じて走っています。

（K）

02 あえて裏紙

真っ白な画用紙ではなく、自分がいったイベントのチラシや作成した原稿の裏紙に絵を描けば、もともとあったデザインや色に自然と影響を受ける（特にうちの子ども）。そのとき何があったかをなつかしく振り返ったり、新たな発見があったりもする（特に自分）。

わら半紙は、インクの染みがよく、子どもたちもその具合を楽しんでいる。

（Y）

03 既製品＋自分らしさ＝新しい物語

便利で、きれいで、快適で、どこでも使えて、長持ちするもの。それは、その製品がもつ機能であり、お金とタイミングさえあれば手に入る。そういったものに限って手に入れた時が最も価値を持ち、自ら手を加えづらい（余地のない）ものが多い。

一方で、世の中には、不便で、快適でもなく、壊れやすかったり、使いづらい、それでもなぜかひかれてしまうものもある。そうしたものに、自分なりの（自己満足的な）付加価値を加える。

・サイズがあわない服を自分サイズに直す。
・使い古したベットシーツをカーテンにする。
・錆びた自転車を好きな色に塗る。
・冷暖房もなく、雨漏れする古い車を安く買う。

すると、その時に失敗したことや、こだわったこと、得したこと、全く想像していたものと違ったこと、これからの使い方を「愚痴れたり」「ネタにできたり」「語れたり」する。これからの物語をどうつくっていくかを楽しむ。

（Y）

04 話したくなるまちのこと/テーラーとやま

今世にある商品で、あなたのためにつくられたものは少ない。S／M／Lというサイズは自分のためにあるのではなく、便宜的に標準化された選択肢の中から自分に近いものを選ばされているに過ぎない。作り手がどんな想いで作ったのか、使い手がどんな風に使っているのか、知ることなく、知られることなく、ものだけが往来する。では自分の家はどうだろう？ あなたのまちは？

妹の結婚式に着る礼服を仕立てることを思い立ち、伝馬通りのテーラーとやまの扉を叩いた。「リバ！」の『今月のかっちゃん』でおなじみの外山さんは、ご自身の意見を交えながら僕の趣味嗜好を吸出し、形にしていく。普段スーツなんて着ないのだが、理想の姿を一緒に創っていく時間、できあがりを待つ時間、そして初めて袖を通す瞬間、それぞれに物語が宿る、至福のときだった。一番左のテキストの冒頭のやり取りは、ここで生まれた。

（A）

Text：Takahiro (Y)amada／Yutaka (A)mano／(K)enshi Fukada